○機を捕ふる力

機を捕ふる力は、凡べて活きたるものを相手とする仕事に於て、最も肝要なる秘訣である。此の力を有するものは、常に成功し、此の力を有しないものは常に失敗する。教育に於ても尙同樣である。否、教育に於て殊に然りと言つてよい。

吾人は、教育の一定の法式と順序とを知らないではない。且つ又教育の計畫を立案し準備するに於て、必ずしも怠つて居るものではない。しかも、此の教育の法則を適用し、此の計畫を履行するに際して、吾れながら驚くべく機を捕ふるの力がない。露骨な言葉を以て言へば、驚くべくうつかりして居る。ぼんやりして居る。敢て不忠實だからではない。敢て他事に心を奪はれて居るのでもない。そんな爲であつたら、それは何と申譯もない道德上の罪である。まさかにそうではないと自分では思つて居るけれども、兎に角く事實上うつかりして居る。而して其の間に、必ずや幾多の貴重なる教育上の好機會を逸し去つて居る。我れながら遺憾に堪えないことである。（倉橋生）

曙

ジヤン・クリストフは御祖父さんと一緒に教會堂にゐる。クリストフは退屈してゐる。餘まり樂ではない。動くなと言ひつかつてゐる。會衆はクリストフの解らない言葉を一緒に云つたり、一緒に默つたりする。會衆は皆鹿爪らしい陰氣な顏付をしてゐる。餘處ゆきの顏をしてゐる。クリストフはこはゝ會衆を眺めてゐる。彼の直ぐそばに腰かけた阿婆さんのリナは意地の惡い樣子をした。をり〳〵これが御祖父さんだとは思へないこともあつた。クリストフは薄氣味惡い。そのうちに慣れて、何うかして退屈を紛らさうとしてゐる。彼は身體を搖つたり、頭を曲げて天井を見たり、洗面をしたり、御祖父さんの着物を引張つたり、椅子の裏を調べて指で穴をあけやうとしてみたり、鳥の囀りを聽いたり、頭が外づれるやうな大欠伸をしてゐる。

俄に音響が瀧のやうに響いた。オルガンを彈いてゐる。戰慄がクリストフの脊筋を走る。彼は椅子の脊中に頤を載せながら振り向く。大そう大人しくして居る。彼には此の音響がさつぱり解らない。そして何の意味やら解らない、その響は目を眩うまし。頭を搔き亂して、もう何物も聽き分けることも出來ない。併し好い心持だ。一時間以前から退屈な古い會堂のぎごつちない椅子に、もう坐つてゐないやうな氣持がしてゐる。鳥のやうに

空中にぶら下がつてるやうだ。そして「音響の河」が壁に衝き當つて迸り。天井を充しながら、會堂の隅から隅へ流れ渡ると、クリストフは響に攫はれて、羽搏をして飛びたち、あちこちと導かれるまゝに任せてるばかりだ。彼はゆつたりとして好い心持である。日がさしてゐる……クリストフは居眠をしてゐる。

御祖父さんはクリストフに對して不滿である。御祈禱のとき行儀が惡い。

○

クリストフは兩手で足を抱へて土間に座りながら家にゐる。彼今しがた靴拭を船だと考へ、敷石を川だと決めた處である。それから敷物のそとへ出ると、土左衞門になると考へてゐたかも知れない。ほかの者が室内を通つても彼のやうに注意をしないので驚いてゐたし、稍怨んでもゐる。彼は褪着の襞をつかまへて母親を引きとめた。

「母ちやんは水だと知てるくせに……橋を渡らなくつちやいけないよ」

橋といふのは菱形の赤い敷石の間に敷いた溝の續きである。母親は耳にも掛けず通つてゆく。丁度戯曲家が自作の開演中に、見物同士が話し合ふのを見るやうな樣子で、クリストフは腹を立てる。

少し經つと其んな事は考へてゐない。もう敷石は悔でない。彼は涎を垂らし、眞面目腐つて親指を舐りながら、自分で節付をした曲を歌ひ、敷石に顎を載せながら、長々と寢そべつてゐる。敷石の割目を凝と見詰めてゐる。赤煉瓦の線が人の顏みたいに澁面をしてゐる。微かな割目が擴がつて谷になる。その廻りに山がある。一匹の百足が動く。象ほど大い。雷が落ちても子供には聞えないだらう。

誰もクリストフにかまつて呉れない。彼は誰にも用がない船形靴拭が無くつてもよい。不思議な草の生えた敷石の洞穴が無くつてもかまはない。自分の身體だけで澤山だ。身體は何といふ興味の泉だらう。彼は爪を見て、げら〳〵笑ひながら幾時間も過してゐる。爪はそれ〴〵違つた顏をしてゐて御馴染の顏に似てゐる。彼は爪を一緒に話させたり、踊らせたり、又喧嘩させたりしてゐる——しそして身體の殘部も玩具にしてゐる——彼は自分に屬してるものを殘らず檢査してゐる。なんと可笑しい物が澤山ある事だらう。ほんとに珍しい物が澤山ある。彼は凝つと見取れてゐる。

時々誰か不意に來て此の樣子を見かけると、手荒く彼を捕まへた。

（後藤末雄譯『ジャン・クリストフ』より）